蓬莱の風
ほうらい　かぜ

加羅古呂庵 一泉

2022. 6.26 作曲

蓬莱の風

日本最古の物語と言われる『竹取物語』。かぐや姫が、言い寄ってきた５人の公達（石作皇子、車持皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上麻呂）に難題を持ち掛けるのは、ご存じのとおり。

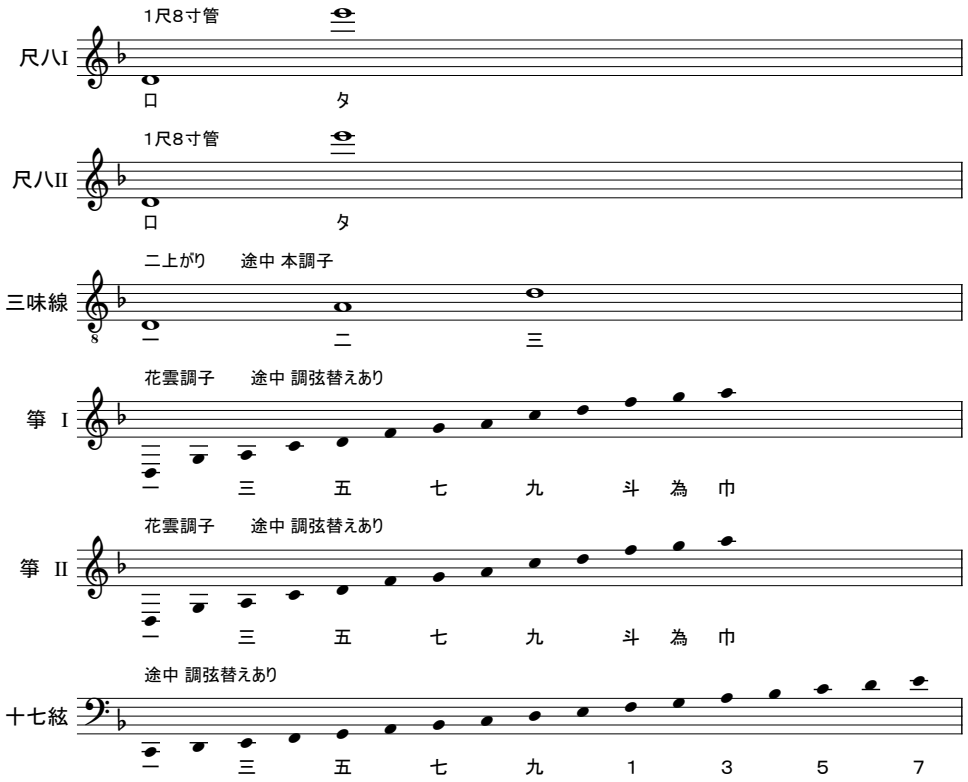
この５人の中でも、蓬莱の玉の枝を求められた車持皇子は、財力に任せて偽物を職人に作らせ、いかにも蓬莱に苦労して行ってきたような話をでっち上げ、なかなかもって質が悪い人物（心たばかりある人）として描かれています。

もし、この車持皇子がもっと正直な人で、実際に蓬莱山に玉の枝（根が銀、茎が金、実が真珠の木）を求めに行っていたならば、どうだったろうと想像して作ったのが、この曲です。もともと蓬莱山自体が想像上のものですから、どのように想像力を働かせたとしても、かまわないでしょう。

「荒波を越えて」「玉の枝のそよぎ」「不老の白煙」「人阻む岩壁」「名残りの海原」「憧れの心」の６つの部分から構成しました。

蓬莱山を求めて海に乗り出し、遠くに玉の枝がそよぎ、不老長寿の白煙がたなびいているのが見えるのですが、厳しい岩壁が人を寄せつけません。たちまち蓬莱の山は幻と消え、そこには海原を風が吹き渡るばかり。理想郷は憧れの世界にあるからいいのであって、最後に玉の枝のテーマを振り返って、終曲を迎えます。

※縦譜につきましては、当該楽器のほかに他の楽器のパートを補助的に記載しています。ただし、複数のパートを集約し、オクターブも変えているところがあります。また、十七絃は箏に置き換えて記載しています。正確には、五線譜（スコア）をご参照ください。



運指、奏法については、適宜工夫していただいてけっこうです。